

らいぶ LIVE 創 REATOR つくりえいたー

NO.39
2007.3.1
研究広報誌

学びの質の高まりをめざして

～「つなぐ」「もどす」みとりと支援により～

CONTENTS

来年度の展望	1
今年度の研究・成果と反省	2
学習紹介：「ICT de 自然の“文脈”をさぐる」	3
学習紹介：「『ずれ』を生かした図形の学習」	4
学習紹介：「楽しく学ぶ音楽の基礎・基本」	5
学習紹介：「子どもたちの考えた実験を重視して！」	6
学習紹介：「段ボールオープン」	7
コラム：「もっと本を友達に」	8

子どもの側に立って、質の高い研究を

和歌山大学教育学部附属小学校

副校長

北原博男



2月に、「ICT活用授業研究会」と「国語力向上モデル事業研究会」の2つの研究会を行いました。全国各地から多数の先生方のご参加をいただき有意義な会を開催できましたこと、深く感謝申し上げます。

「ICT活用授業研究会」には、大阪教育大学教授の木原俊行先生・メディア教育開発センター准教授の堀田龍也先生はじめ、国内外で活躍されている先生方にご指導いただきました。本校では昨年度より、子ども達の学習意欲を高める授業改革の一つとして、ICT活用の実践研究に取り組んできました。本年度は、「情報機器を活用し、子ども達の学習意欲を高める授業」・「情報モラルの育成をめざす授業」・「情報活用能力を育む授業」の構築という3つのねらいをもって授業研究を行いました。本校にも、ICT活用に慣れている先生もいれば、そうでない先生もいます。しかし、いろんなレベルの先生が、いろんな場面で、どんなICT活用が考えられるのかを見ていただこうと、全員授業することにしました。各自のレベルに応じて全員が普通の授業の中で刺激しあって、ICT機器を活用することが大切だと思います。

木原先生の～「ICTを活用して、いい授業をしよう」というのではなく、「いい授業を考えてみると、ICTを使ってた」～という言葉が印象に残りました。ICT機器の操作が本質ではなく、いい授業をするために、「何を映すか、その時に何と発問するか、何と指示するか」という深い教材研究に支えられた授業技術が重要なのです。授業が豊かになるようにICT活用に取り組むことで、私達の授業力の向上を図りたいと考えています。

「国語力向上モデル事業研究会」には、岡山大学教育学部教授の菅原稔先生にご指導いただきました。

国語部では、「発想力」「論理力」「表現力」を育てる～言葉にこだわった、対象・他者・自己との対話を通して～をテーマに研究に取り組んできました。研究会では、国語部の4名が公開授業・研究授業をそれぞれ意欲的に行いました。菅原先生のご講演の中での言葉を、いくつかご紹介します。

- ・言葉の感覚を鋭くする
- ・ぼくなり、わたしなりの読みを成立させてあげることが大切
- ・論理を支える情意力
- ・文字 イメージは、一人ひとり微妙にずれている
- ・最大公約数として重なる読みとずれているわたしだけの読みがある
- ・子どもが何に目を向けなければならないかを自分に問いかけていくために発問は大切だが、発問が多すぎると自ら動こうとしない子どもになる
- ・学習スタイルの違いを大切に、じっくり自分なりに読むために時間がある子どももいる
- ・考えを整理させるために書くことは大切
- ・国語の授業が楽しい、言葉を大切に育ててほしい など

菅原先生のお話は、楽しい中でも教育の本質をとらえたものであり、どの教科にも通じるものという感じがしました。今後の研究に生かしていきたいと思えます。

本年度、2つの研究会の他に、「複式教育研究会（6月）」「夏季教科別研修会（7月）」「教育研究発表会（11月）」と合わせて5回の研究会を行いました。大変忙しい一年間でしたが、研究の幅を広げるのにより年だったように感じています。また、私達の研究主題「学びの質の高まりをめざして」にむけての課題もたくさん見えてきた年でした。どの子どもも課題に対して積極的に取り組み、自分たちの力で学び取る喜びを実感できるような学びをめざして、子どもの側に立って学習の見直しをしたいと思っています。そして、私達の研究をより質の高い、深みのあるものにしていきたいと願っています。来年度も、11月1日（土）に研究発表会を開催し、東京大学大学院教授の佐藤学先生にご指導していただきます。よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

今年度の研究・成果と反省

学びの質の高まりへ向かうために（今年度の研究の成果と課題）

学びの質の高まりをめざして
～「つなぐ」「もどす」みとりと支援により～

研究主任 志場 俊之



昨年度は響き合うということをめざした結果、学級全体が響き合う関係になっているかを主にみとり支援していたため、「授業としての成立」を結果的にめざしてしまった。

今年度はその反省を生かし、子どもの側に立ち、子どもが授業を創り上げていく学びの展開をめざさなければならぬと考えた。「学びの成立」をめざそうとしたわけである。

そうした実践の中で、得られた成果は2つある。

1つは、「学びの成立」をめざしたことにより、子どもに寄り添いながら学びに合わせた対応ができたことである。昨年度と大きく違う点は、個を見ることを中心に、個を通して全体を見るという考え方を採ったことである。

「学びの成立」をめざす場合、個がどのような学び方をしているかをみとり支援していくのが大切になる。学びに合わせた対応は、カリキュラム作りに対する考え方にまで及び、従来の出来上がったプログラム型からプロジェクト型へと、子どもに寄り添いながら子どもとともに創っていくことを意識できるようになった。

もう1つは、グループ学習を組織したことで、子どもに学ぶことへの意欲が出たことである。

個を見るから、個の学びがはかどっていないとみとればグループ学習を組織する。個を見るから、個の理解力の引き上げを図るタイミングが分かるのである。その結果、子どもどうし質問し合ったり、分かりにくいことを出し合ったりする機会が増えた。

また、グループ学習はアイデアを共有し吟味することで質的な高まりをめざすことにつながった。何でも出せる雰囲気言い合える関係を生み、一斉学習が活性化していったといえる。

量から質の時代へ、時代は大きく様変わりした。学びもまた同様に質が求められる時代となってきた。つめこみ教育からゆとり教育へ、そうしてまたゆとり教育に対する弊害が指摘されるようになってきたため、新しい学習指導要領では少しの揺れ戻しが見られるが、ゆとり教育は学びの質を求め、それを高めるためにあると捉えたい。

来年度も「学びの質の高まり」をめざすつもりであるが、今年度浮かび上がってきた反省点を以下に3つ挙げ、来年度への課題としたい。

第1に、学びの環境作りが重要であると認識し、学びの質を高めるための土台作りとして取り組んだが、思うように作り上げられなかったことである。

そのため、「友達の意見を主体的に聞く」、「自分の考えと比べながら聞く」などの聞き方や、目的意識や相手意識を持ちながら伝えたいことの内容を意識し思いを届けようとする話し方を鍛えるなど、話し合える集団作りが必要であると考えた。それに、自分とはちがう価値観や考え方であっても、あたたかく受け止めることのできる柔軟な姿勢をもった集団作りをしていく必要があると考えた。

第2に、「学びの質の高まり」へ向かうための方法として、「みとりと支援によって」のように方法を限定してしまったことである。

今年度は、学びの質を高めるためのキーワードとして、みとりと支援を掲げてきた。しかし、そのキーワードとなる要素はほかにもある。例えばグループ学習であったり、対話を磨くことであったり、学びの環境作りであったりと、質的な高まりをめざすための要素は多様である。確かに、みとりなくして子どもの学びが成立しているかどうかは見極められない。支援なくして子どもの学びの質を高めることはできないであろう。しかし、「学びの質の高まり」へ向かうための方法を「つなぐ」「もどす」みとりと支援に限定せず、幅広く子どもの学びの質を高める方法を研究していくことをめざし、自由に研究できる場を設定したい。

第3に、「学びの質」とは何かということについて、教科による特性の違いもあり、捉え方が統一できなかった点である。

今後、「学びの質」を構成する要素についての研究を進めていきたい。そして、わたしたちが提示した「学びの質の高まり6段階」が果たしてすべての学びに当てはまるのか、これから検証を進めていきたい。

また、今年度の研究会では佐藤学先生（東京大学大学院教授）から次のような期待を込めた言葉を頂いた。

- ・21世紀型の学校のパイロットスクールへ
- ・21世紀型の学びの様式の先導的モデルを提供する学校へ
- ・学びの〈質〉において卓越性を示す学校へ
- ・専門家共同体のモデルスクールへ（校内研修のモデル校へ）
- ・大学との協同、公立学校とのネットワークの拠点校へ

これらの内容は、わたしたちにとっては高い目標かもしれないが、先に掲げた3つの反省点を生かし、期待に応えられるような取り組みをしていきたい。

そうして、自分の力で学び取ったという喜びを実感できる「学びの成立」をめざした授業を創り上げるよう、努力していく。そして、それが、より質の高い、深みのあるものになるよう、これからの研究を進めていく次第である。

ICT de 自然の“文脈”をさぐる

～「めざせ！アインシュタイン」の学習より～

理科

3年C組担任

中井 章博



本年度、本校理科部は「自然の“文脈”をさぐる子どもを育てる理科学習」をテーマに、自然の事物・現象の筋道や背景をさぐる研究を進めてまいりました。また、ICT（Information and Communication Technology「情報通信技術」の略）についての研究も進め、効果的な活用をめざしてきました。今回は、2月1日のICT活用授業研究会での授業「めざせ！アインシュタイン～“光”のひみつをさぐる～」について紹介します。



1

スクリーンに学校周辺の景色を写しこんだ記録用紙を投影し、子どもたちがマーカーペンで太陽の動きを書き込んだ。ICT活用で、互いの結果や考えを比較しやすくなる。

本時の課題は「太陽とかげの動きをさぐる！」子どもたちは周りの景色を写しこんだ記録用紙に太陽の動きを記録している。しかし、太陽の動きは非常にゆっくりであるため、その軌跡までは記録できていない。「直線的に動く」と考えた子、「円を描くように動く」と考えた子、昼間だけはまっすぐ水平に近いと考えた子、様々であった。

子どもたちが考えた太陽の動きを「かげの動きの記録用紙」に重ねてみる。新たな視点が加えられ、子どもたちの思考はひろがる。太陽の高度とかげの長さの関係や、正午の太陽の高度と位置、子どもたちは太陽とかげのつながりを再確認しながら、さらに太陽の動きとかげの動きをさぐる。



2

ペンで書き込んだスクリーンに、今度はかげの動きの記録用紙を投影し、太陽とかげの動きの記録を重ねて考える。ICT活用により、それぞれの関係を視覚的にさぐる。



3

太陽とかげの動きの観察 ICTを活用しての学習 太陽とかげの動きの実験、というようにアナログとデジタルをつなぐことにより、子どもたちの学びは深まる。

懐中電灯を太陽に見立て、自分たちの「かげの動きの記録用紙」に光を当てることによって、太陽の動きを再現してみる。「太陽の高度が高いとかげは短く、低いとかげは長くなる」ことを徐々にではあるが確認できたが、太陽の動きを再現することはなかなか難しい。

「太陽の動きとかげの動き」の両方を写しこんだコンテンツを活用し、「太陽とかげの動き」をさぐる。子どもたちは、「太陽の軌跡」や「かげの伸び縮み」、そしてそれらの関係をじっくりと確認することができた。そして、自分の記録用紙にもどり、動きをイメージしていたのである。



4

実際には太陽とかげの動きは速くて確認することはできないが、微速度撮影したコンテンツを活用すると、太陽とかげが反対に動いたり、かげが伸縮したりすることも確認できる。また、自然のすごさに感動する姿も見られた。

単元導入前、太陽とかげの動きについての考えをほとんどもつことができていなかった子どもたちでしたが、対象にたっぴりと触れるアナログ的な活動とICTの効果的な活用を織り交ぜ、つなげて活用することにより、子どもたちの「実感の伴った、納得のいく理解」を促すことができたと考えています。さらに、「どうして太陽は動いているのか?」、「本当は地球が動いているんだよね。」「太陽が高いときに気温が一番高いのはどうして?」といった、自然の“文脈”をさぐるようとする子どもたちの思考のひろがりが見受けられました。それは、子どもたちが学びの中で、事物・現象の真理を追究していこうとする表れであると考えています。

このように、【子どもたちのアナログ的な実験】 【デジタルコンテンツ】が双方向に影響し合い、それぞれにおける学びの質が高まっていけるようにと日々、研究を進めています。そして、子どもたちが自らの学びの質を高めていけるようなICT活用ができるように、今後も研究を進めます。

子どもがつながる算数科学習～思考のずれを生かして～
「ずれ」を生かした図形の学習

算数科
 5年B組担任
 土岐 哲也



考えることを楽しむ

子どもたちが互いに学び合えるように、思考のずれを生かした授業実践を行ってきた。本年度は、特に図形の学習に重点を置き取り組みを進めてきた。

子どもは、知的好奇心が旺盛なものである。わからないこと、知っていたことがちがっていた、そういうときにはじっとしてられない。そして、「どうしてそうなるのか」、「他に解く方法はないのか」など答えを導き出そうとする。しかし、実際のところ、子どもたちは答えを知ることが急ぎすぎるようにも思われる。今もっている知識や考え方をどう生かせばいいのか、「ああでもない」「こうでもない」と、じっくり自分たちの力で解決に向かってもらいたい。そういうプロセスを大切にしてほしい。そのために「あれ？どうしてだろう」という“？”をできるだけたくさんだせるようなしなかけをしておかなければならない。子どもたちが“？”について話し合う経験を通して、「考えることって楽しい」、「算数っておもしろい」という子が一人でも増えるようにしたい。

図形における「思考のずれ」

「四角形の内角の和」の学習場面

導入に「敷き詰め」を使うことにした。正方形・長方形は敷き詰められるかどうか予想を立てさせた。これは、既習事項なので、子どもたちはすぐに「敷き詰められる」と答えた。次に、平行四辺形・台形ではどうか。これも時間を要せず「敷き詰められる」と答えた。「こんなの簡単、簡単」という声も多く聞こえた。そこで、平行な辺のない四角形についてはどうかと問いかけた。すると、「できない」「できるんじゃないかな」「先生が言うんだからきっとできるんだ」という答えが返ってきた。「思考のずれ」の発生である。あとは、実際にやってみようということになり活動に入った。操作活動中、子ども同士の話し合いが始まった。ここで学び合っている姿がみられる。操作活動の結果、敷き詰められることがわかった。さらに「どのようにしたら敷き詰められたか」を問うと、次のようなことに気づいた。



平行な辺を含む四角形 頂点同士あわせなくても敷き詰めることができる

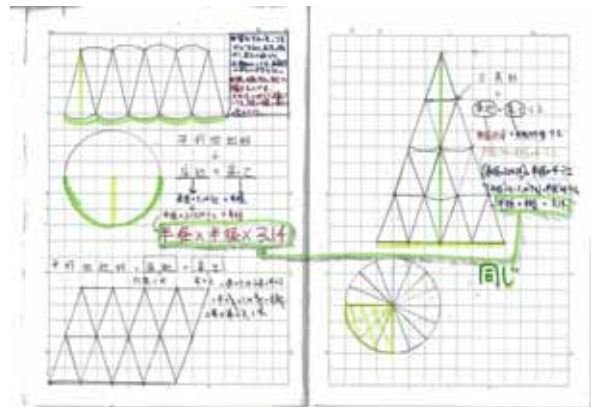
平行な辺を含まない四角形 頂点をあわせないと敷き詰められない

そして、頂点同士合わさったところに注目させると、子どもたちは四角形の内角の和は 360° であることに気付いていった。

「円の求積問題」の学習場面



円の面積を求める公式を考えさせるとき、等積変形したり、式を変形したりする力が必要である。そこで単元の順序を変更し「図形の面積」の学習の後、続けて「円」の学習をすることにした。「図形の面積」で、いろいろな形に変形させて自分の知っている公式を使えるようにする考え方を学習しておく。「式の変形」は、分配法則を使った式の変形を習熟させる。その上で、円の面積を求める公式を子どもたちの力で作らせようと考えた。「円の面積」での「ずれ」は、「曲線をどうするか」だった。円を平行四辺形に変形するグループ、三角形に変形するグループがあった。やはり、一人の男子から「辺がまっすぐではないがいいのか」という“？”が出た。「円を細かく切れば直線に近づくんだよ」という意見にも納得できない様子であったが、「ピンと伸ばせば直線になるし、長さも変わらないよ。」という意見にみんな納得していた。



グループ、三角形に変形するグループがあった。やはり、一人の男子から「辺がまっすぐではないがいいのか」という“？”が出た。「円を細かく切れば直線に近づくんだよ」という意見にも納得できない様子であったが、「ピンと伸ばせば直線になるし、長さも変わらないよ。」という意見にみんな納得していた。

実践を振り返って

今年度取り組みを進めてきて、授業や授業後の感想の中で、子どもたちのいろいろな考え方やこんなときどうするのだろうという意見が出てくるようになってきた。仲間と話し合うことを通して考えることが楽しくなってきたように思われる。それとともに、自分の考えをうまく表現できないという問題も出てきた。今後、図や表をうまく使って考えたり相手に説明したりする力をつけていくことも考えていきたい。

楽しく学ぶ音楽の基礎・基本

音楽科
1年A組担任
田辺 麻衣子



音楽科では、「音楽が好きだ・歌いたい・演奏したい・聴きたい・創りたい」という子どもを育てることを目指しています。
今年度は「音作り（創作）」領域に絞って研究を進めてきました。

「おちば」の実践から

1年生の教科書教材『おちば』の最後1小節を使って「ふしかえあそび」をしました。「ド・ド・ド」の部分「ド・ミ・ソ」の3音を使って自分で好きなふしに作りかえ、鍵盤ハーモニカで演奏しました。また、作ったふしを書くことにも挑戦しました。



子どもたちの作ったふしを見ると、「ソ・ミ・ド」「ソ・ド・ド」のような「たん・たん・たん」のリズムのほかに、「ミソ・ミソ・ド」「ソソ・ミミ・ド」のように「たた・たた・たん」のリズムにあわせてふしを作っている子どもも見られました。さらに、自分の作ったふしなので、よりいい音で演奏しようとする姿が見られました。



今まで以下のことを大切にしてきました。

ふしをつくるまで

『おちば』の実践をするにあたり、とても重要だったのがその前に学習していた『みつばちのぼうけん』でした。ここでの「おとあそび」で自由にふしを子どもたちに作らせておくことが次に活かされてきます。ド～ソの中から音を選び、ふしを作ってみんなでリレーをしました。作ったふしを聴き合う中で自分と同じふしを見つたり、誰とも違うふしを考えたりする中で、ふしを作る楽しさを感じることができました。

また、いろいろなリズムに慣れるために授業の導入では「リズムあそび」を行っています。「たん・たん」「たん・たた」「たん・うん」などを書いたカードを組み合わせてリズムを作り、拍の流れによって手拍子を打つ活動です。

ふしをかくまで

子どもたち（ピアノ等習っている子どもは除いて）にとって「音符を書く」という活動は初めてのことなので、楽しく取り組めるよう工夫しました。



まず、『どんぐりさんのおうち』を使ってド～ソにみんなで名前をつけました。鍵盤ハーモニカにもド～ソのおうち（場所）が決まっているように五線譜にもド～ソのおうち（場所）があるのだと教えました。

その後、授業の中で少しずつ音符を書く練習を取り入れました。

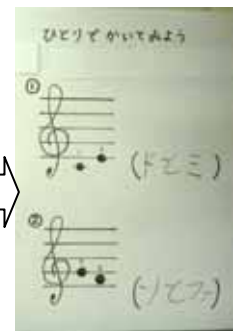
ド・・・どんぐりさん
レ・・・レモンさん
ミ・・・ミントさん
ファ・・・ファンタさん



見ながら書く。



1人で書く。



1人で書いて読む。

興味関心から知的好奇心へ

～子どもたちの考えた実験を重視して！～

理 科
4年B組担任
馬場 敦義



理科の授業は基本的に楽しい！



理科の授業が好きな子どもたちは多いです。私のクラスでは、理科が好きだという理由として、「実験が楽しい」、「観察が楽しい」、「生活に役に立つ」などが上位にあがります。中には「自分のしたい実験ができる」、「新しいことを知ることが楽しい」という理由の子どももいます。4年生当初のアンケートでは、観察が楽しい、実験がたのしみなどの意見がありました。今年度、子どもたちの考えた実験を重視した授業を展開してきたことがこのような理由を引き出したのではないかと考えています。

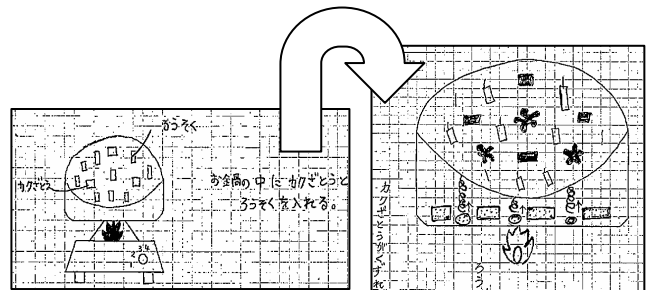
水のあたたまり方の実践から

もののあたたまり方の単元で、どんなときに水をあたためるかを聞いてみたところ、「お茶をわかすときに、水をあたためる。」「カップラーメンを作るときに使う。」「お風呂をわかしたりする。」など生活の場面が出ました。それらをもとにどのようにあたたまっていくのかを予想してみると、主に4つの意見になりました。1. あたためたところから順番にあたたまっていく(27人) 2. 下からあたためると下の方があたたまり、あたたまったお湯が上にいく(5人) 3. 下から上にあたたまっていく(2人) 4. 全体が一気にあたたまる(1人)。ある子どもが、下からあたためると下の方があたたまり、あたたまったお湯が上にいくと考え、みそ汁を例にして「みそ汁をあたためると、浮き上がってくるように見えるから。」と説明しました。すると、順番にあたたまっていくと考えている子どもから、「それはみその重さでそうなっているから、小麦粉を水にといても同じことが起こる。あたためたこととは関係ない。」という意見を出されました。そこで、確かめるために鍋にみそを入れて実際にやってみるようになりました。実験をしてみると、やはりみそが対流していることが明らかになり、生活経験をもとにして自分の考えを紹介し、別の考えの人が意見を出していくことで何を明らかにしたいのかが明確になっていきました。



一見結果がわかりにくい実験からでも

また結果がわかりにくい実験も行われることがあります。ある班は、鍋に水を入れ、その水のあたたまりの変化を角砂糖やろうで観察しようとしていました。このような方法では一見水のあたたまり方を明らかにできそうにありません。ところが、その実験から子どもたちはとけた砂糖が水の中で動き回っていることに気がつき、対流について考えていくことができました。このような興味関心からはじまった実験であっても、よく観察していくことで大切なことを見つけることができ、そのことがさらなる実験、さらなる学びへとつながっていくことがあります。子どもの目線を大切にしながらの授業をこれからも考えていきたいです。



(お鍋の中に砂糖とろうを入れて学ぶ)

予(ろうが上にあがり)

結(ろうが下のほうから回りながら温まっていくことがわかった)

考(回りながら上に温まっていく)

段ボールオープンでお菓子づくり

1年生の生活科

生活科
1年C組担任
上田 恵



今年度の生活科のキーワード『real』

今年の生活科のキーワードは、「リアル」です。それは、「実物」「実体験」「素材そのもの」「リアルタイム」等の意味をかけています。

素材に迫る学習と並行して行なった取り組みの一つとして、段ボールオープンを使用しました。

段ボールオープンとは文字のまま、段ボールの内側にアルミホイルを貼って、熱源を入れ、反射熱で調理するオープンです。

準備物

- ・段ボール...大きさ(目安です) 横 50cm×縦 40cm×奥行き 30cm ぐらいの大きめが使いよいです。
- ・アルミホイル...1巻もあれば、おつりがきます。
- ・竹の棒...直径 1cm ぐらい×2本 段ボールオープンの横幅以上
- ・お菓子の缶...進物用の大きめのお菓子の缶(段ボールに入るもの。大きめがいいです。)



作り方(使い方)

1. 段ボールの内側にくまなくアルミホイルを貼る。
2. 上3分の一の辺りに、竹の棒を平行に2本さして、アルミホイルで巻く。
3. 下の部分にブロックや石を置き、その上に赤くなった炭を入れた缶を置く。
4. 2本の竹の棒の上に、ケーキなど焼くものを入れた缶を置き、蓋をする。



子どもたちの気づき

たき火で焼き芋をした時に、枯れ木が炭になることは経験済みでしたが、その時に「この炭もったいないなあ。」というつぶやきがあり、炭を使う学習として段ボールオープンにつながりました。また、焼けすぎた芋を手にした子は、芋を包んだアルミは燃え残っていて、「外のアルミは焦げてないのに中の芋は真っ黒や!」と驚いていました。

このように、アルミは燃えないことや、炎が上がっていない炭でも十分熱いことなどに気づいていきました。

子どもたちの日記を読むと、よくケーキやクッキーを作っているようです。オープンは使い慣れていると言ってもいいでしょう。そこで、生活科では段ボールオープンでクッキー作りを試してみました。

このオープンは、タイマーなどないのでときどき、中をのぞいて出来具合を確認しなければなりません。蓋をしていても焦げ臭い匂いが周りに立ちこめて、大騒ぎになったり、休憩時間にボールが当たるといけないからと、段ボールオープンの前で、ゴールキーパーのように並んで、守ったりしていました。

子どもたちに成功体験をさせたいと願い、先回りして失敗しない手を打ちがちですが、失敗してこそ、「炭が多すぎたんじゃないか?」「時間が長すぎたと思う。」「下に石を置かなかったから、焦げて段ボールに穴が開いたと思う。」など、試行錯誤につながる気づきがありました。

焦げすぎた苦いクッキーを前に、ある子どもは、「失敗は成功の元や。」と、みんなを励ましていました。

そういう気づきを生かして、2回目はカップケーキに挑戦。今度は、ふわふわ大成功。生クリームを飾って、おいしくいただくことができました。



もっと本を友だちに

～ 附属小学校・図書館教育充実への取り組み～

北川 勝則



文部省（当時）「児童生徒の読書に関する調査研究協力者会議 報告」（1995年）の中には「子供の読書とその豊かな成長のために、3つの視点 10の提言」がある。そのうちの、

新しく魅力的な学校図書館をつくるために

7．学校図書館の機能を充実する校内の協力体制をつくろう。

学校と家庭・地域との連携のために

9．子供の読書の基盤を家庭と地域につくろう。

について本校の取り組みを紹介したい。

まずは、「9．子供の読書の基盤を家庭と地域につくろう。」である。学校と家庭の連携で、真っ先に自慢できるのが本校保護者による図書ボランティアグループ Lalalu（ラルルー）さんの存在である。その活動内容は図書の整頓・図書の貸し出し補助・図書の修繕・図書室の掲示・児童への読み聞かせ等多岐にわたり、様々な面で学校図書館教育をサポートしていただいている。子どもの読書環境はこの活動によりかなり充実したものになっているといえるだろう。



次に、「7．学校図書館の機能を充実する校内の協力体制をつくろう。」である。本年度には図書管理システムを導入することになった。システム導入のためには全ての蔵書にバーコードを貼り、コンピュータに図書情報を登録する作業が必要になる。1万5千冊近い蔵書を全職員とLalalu（ラルルー）さん達の全面協力で作業に当たった。そしてその結果、冬季休業前にはシステムを稼働することができた。このシステムにより、図書の貸し出し返却がスムーズに行われるようになってきている。

そして、何より嬉しいことには、システムの図書検索機能を子どもたちが利用できるようになっていることである。低学年児童でも、図書の時間に、「貸し出されていない『かいけつゾロリ』の本、まだあるかな。」と貸し出し状況を確認に来たり、自分が借りたい図書の名前から蔵書を検索し、「日本十進法」の番号を確かめ、その番号の棚に図書を探しに行くことができるようになってきている。

今後は、「6．学校図書館を学校の学習情報センターにしよう。」そして、新指導要領の「学校図書館などを計画的に利用しその機能の活用を図るようにすること。」を実現していきたい。そのためにも、子どもたち自身で図書管理システムを学習目的に応じて活用できるようにしていくことや様々な調べ学習に対応できる図書の充実、検索のための機器の増設等にも取り組んでいきたいと考えている。

From Editors

和歌山大学教育学部附属小学校

梅の花が咲き、春が近づいてきています。
2007年度も、あとわずかです。HPではカラーで紹介していますので是非ご覧ください。
ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号
TEL (073) 422-6105
FAX (073) 436-6470
URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>
E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp